

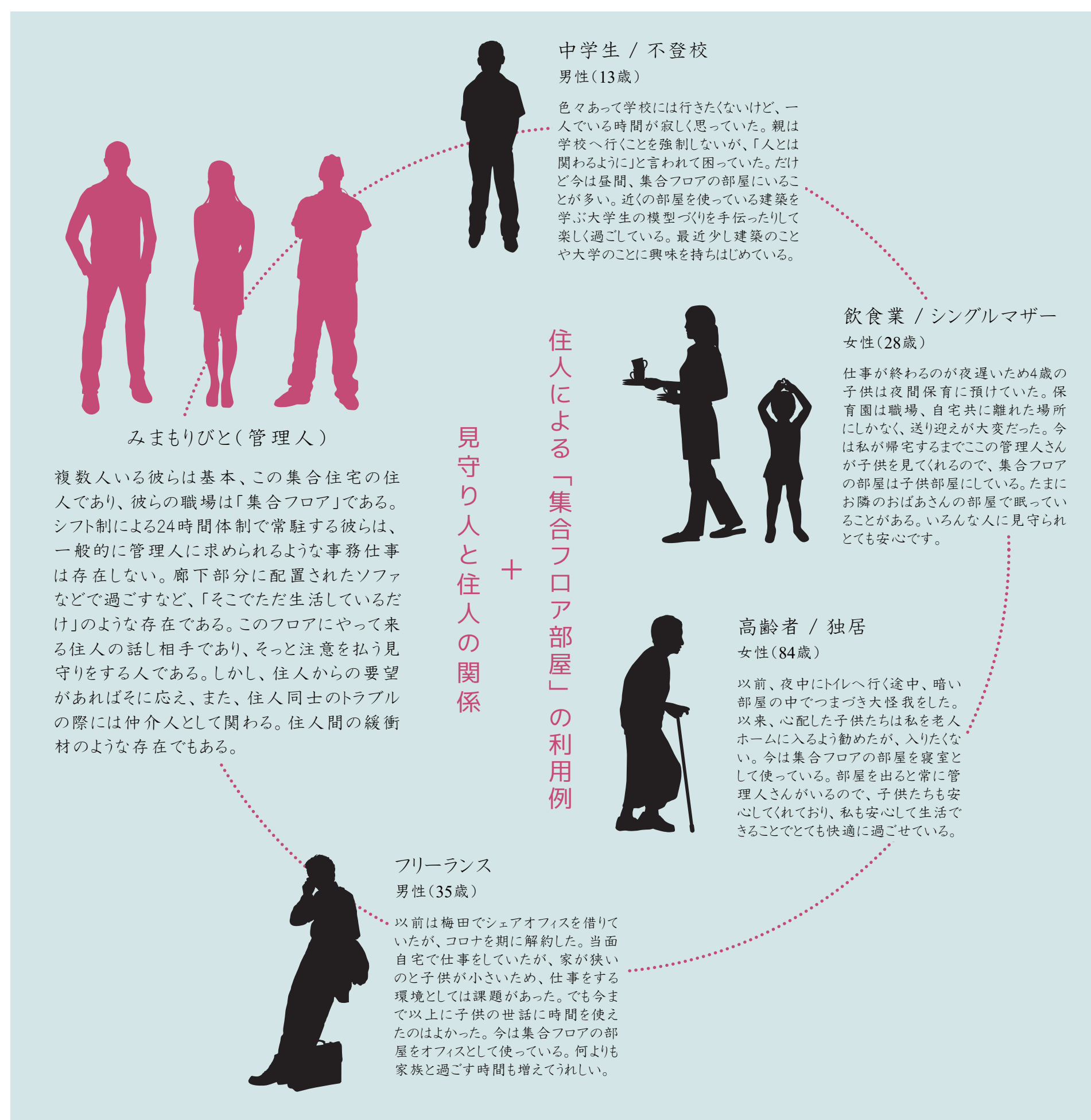
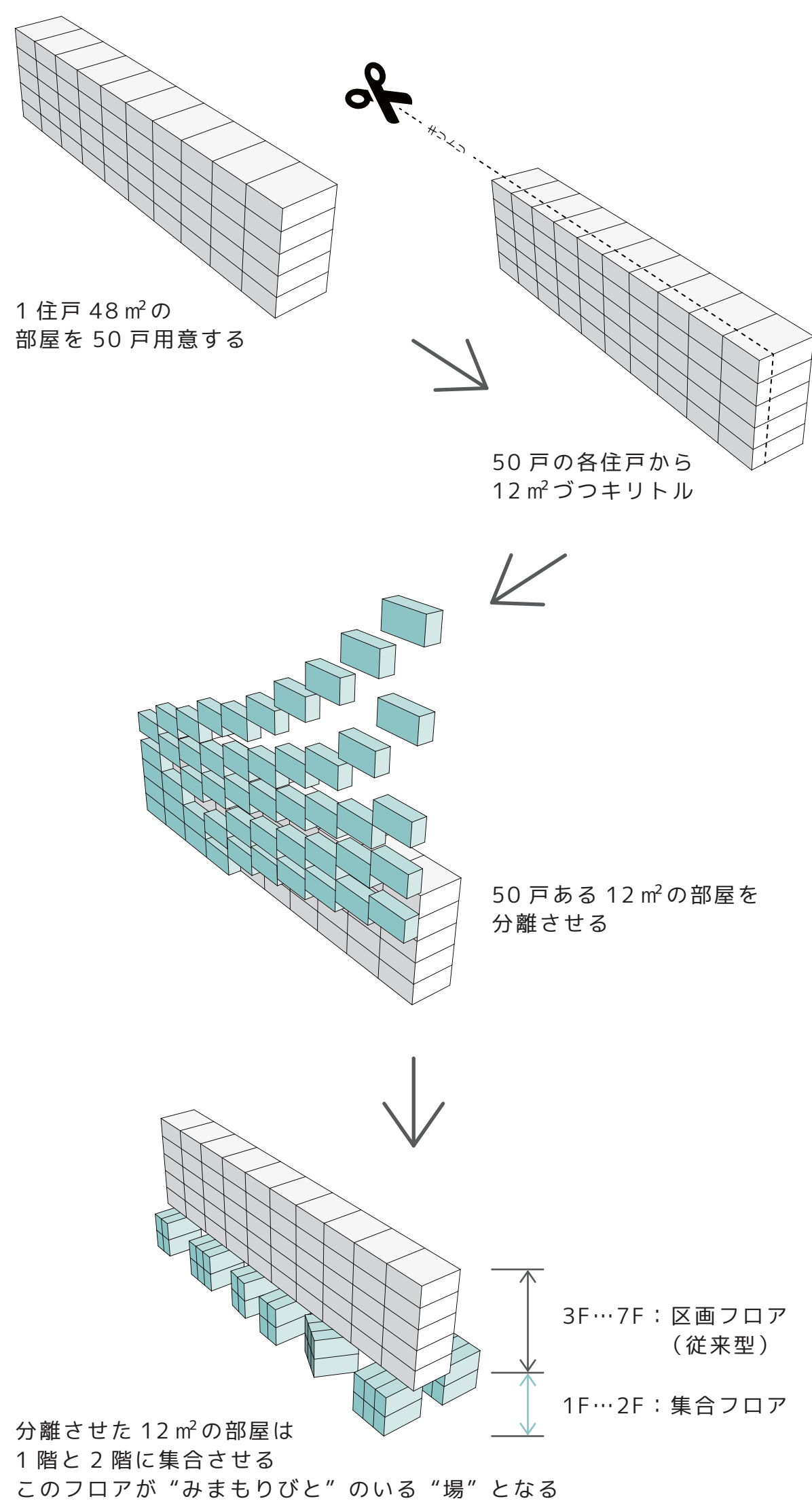
“みまもりびと”のいる家

狩猟採集時代、家族単位は大きく、生まれてから死ぬまで家となる“すみか”で常に一緒にあった。そして現代、私たちは日々の生活のために機能で分化された様々な場所へ移動する。だがコロナにより、その移動は途絶え、一部狩猟採集時代の生活に戻った。

リモート化により仕事の場や学びの場と生活の場はひとつになった。それは人によっては素晴らしい現象である。そして私たちは更に分化した機能を取り戻す“すみか”を提案する。それを実現させるのは、新たな管理人像となる“みまもりびと”がいる家である。



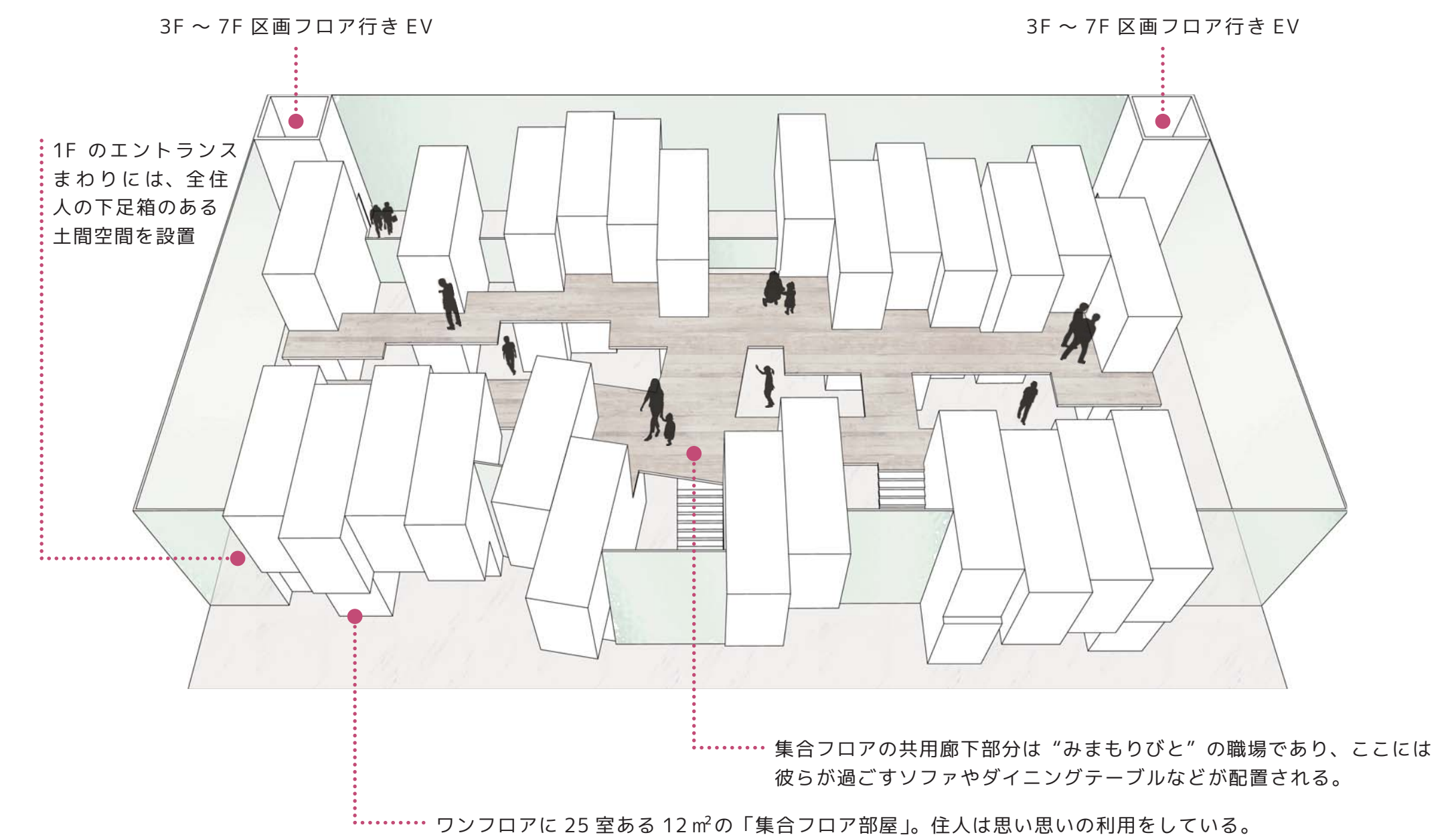
“みまもりびと”のいる“場”をつくる



近年の生活の仕方の変化はめまぐるしく、今までの大多数を占めていた「型」から細分化した多様な「型」へと移行している。特に、コロナきっかけのオンラインの増加による対面コミュニケーションの減少など、短期間で変化があった。そして「別に人と関わらなくていい」「人と話したくないが気配は感じたい」「人ともっと会って話したい」など、人の気持ちも分かれた。

各住戸の 12㎡の部屋が集合する、この『集合フロア』には、“みまもりびと”である複数の管理人が常駐することで、細分化した多様な生活の「型」と、「人との距離感を自分のタイミングではかりたり人」を受け止める“場”となる。

この集合住宅は全フロア“土足厳禁”とする。直接的に人と関わることなく「人を感じる」ために、「人の生活領域に入る行為」を「靴を脱ぐ」ことに置換した。自分の家でなく他人の家（領域）に踏み入れる感じをつくる、他人の存在を強調する、共有部分に段差を作り下足箱を置くことにより、下足箱の中の靴でも他人の存在を感じることができる。これらの行為はひとつの大きな家族をつくる。



集合フロアイメージ鳥瞰図